

日本の現状が閉塞状況にあることは、だれもが納得している。どのように打開していくかが課題であるが、これには二種の方法がある。部屋が息苦しくなった状態を打開する場合を事例にしてみる。第一は空調設備を設置して徐々に空気を清浄にしていく方法、第二はドアを開放して一気に外気を導入する方法である。前者は快適な状態を維持しながら解決できるが時間がかかる。後者は風邪をいくかもしれないが一気に問題は解決する。

小泉内閣以前は前者の方法で努力してきたが、なかなか成果が実現してこなかったため国民が我慢できなくなり、後者の方法で断行すると明言した小泉内閣が支持されたというのが現在の状況である。その結果、倒産企業も失業者数も史上最大になっているが、国民は我慢している。問題は、ドアは開放されたが、国民が寒風の流入してくる部屋に停滞したままで、外部に進出していかないことである。

アメリカも閉塞状況に直面したとき、ドアを開放する政策を何度か実施している。世界恐慌で現在の日本以上の不況になったときには、ニューディール政策が実行された。スプートニクショックによりソビエト連邦の脅威に直面したときにはニューフロンティア政策が提言された。日本の躍進によりアメリカの経済が停滞したときにはサイバーフロンティア政策によって国民を鼓舞した。そしていずれも成功し、アメリカは蘇生した。

現在の日本にとって必要なことは、開放されたドアの外側、すなわち未開の大地であるフロンティアに進出していくという意気をもつことである。フロンティアは様々な分野に存在する。携帯電話が普及していない途上諸国に市場を開拓することもフロンティア開拓であるし、インターネットを駆使したビジネスモデルを開発して新規の商売することもフロンティア開拓である。

しかし、規模においても魅力においても最高のフロンティアは科学技術の分野に存在する。ナノの単位の分子や原子を操作してモノを製造するナノ技術がもたらすナノ・フロンティア、頭脳の活動を解明することによって個人個人の欲求に対応したサービスを提供する技術がもたらすインナー・フロンティア、地球規模の環境問題を解決する技術がもたらすエコ・フロンティアなど、科学技術の分野には豊富なフロンティアが存在している。

世界の先進諸国は競争でこれらのフロンティアに進進しており、日本も昨年発足した総合科学技術会議が情報科学、環境科学、生命科学、ナノ技術を重要分野に設定し、今後五年で二四兆円という巨額の予算を用意してフロンティア開拓の陣頭指揮をしている。これはそれなりの目標を達成することは確実であるが、課題はフロンティア開拓に特有の性質にどのように対処するかということである。

アメリカの西部開拓を想起すれば理解できるが、いくつかの法則がフロンティア開拓には存在している。第一は先着優先の法則である。西部開拓であれば最初に金鉱を発見した人間に権利があり、科学技術では特許を取得した人間に権利がある。第二は勝者独占の法則である。成功した人間や企業が市場の大半を独占してしまうということである。第三は弱肉強食の法則であり、成功したものと失敗したものとは天国と地獄の格差がある。

マイクロソフトのOS、シスコシステムのルーターなどは、これらの法則を証明しているが、これらのフロンティア開拓も同様の弱肉強食の原理でいかは疑問である。環境問題や生命科学は人類の将来を左右するフロンティアであり、市場原理で突進していくことには非難もある。日本はフロンティア開拓に協調や共生の法則をもたらす最初の国家として次代を開拓していくことを期待したい。